

## 巻頭言

『やまぐち学の構築』第七号をお届けする。本プロジェクトの目的は、地元山口県の有する、歴史的・文化的な固有性を解明し、学問的裏付けに基づく「やまぐち学」を構築することである。地域の固有性（アイデンティティ・尊厳）と全国的・世界的普遍性を、対概念として捉えて探求しようとしている。

一昨年十月に山口大学の第Ⅱフェーズの研究推進体が発足し、一三のプロジェクトが学長の認定をうけて発足した。わがプロジェクトも、そのうちの一つに選ばれ、第Ⅰフェーズに続き、次の五年間をスタートさせた。これを機会に、シンポジウムを開催することにした。第一回のやまぐち学シンポジウムは、三月二十二日に山口大学学生会館で、「萩藩研究の新展開」と題して、三名のメンバーの報告と討論を行った。つぎの三つの報告を行い討論をして、盛会であった。地元の方々との交流は、楽しい。

田中誠二「萩藩財政史研究の課題」

木部和昭「下関越荷方の再検討」

森下 徹「城下町と武士」

今年度も、「考古学から見た山口県の文化交流」と題して第二回のシンポジウムを開催する予定である。つぎの三人の報告・中村友博の総合同会と討論を予定している。

村田裕一「鉄器から見た弥生時代の山口県域」

横山成己「山口県の経筒」

田畑直彦「堀越焼きの甕作り」

山口大学附属図書館では、図書館職員のかたがたを中心に、所蔵史料である林家文書の研究会があり、わがプロジェクトも山口大学学術資産継承事業の一環として支援している。昨年三月に林家文書目録のインターネット公開お披露目・勉強会が開催された。林家文書は、幕末・維新期に活躍した大庄屋林勇藏家の文書で、研究者の間ではよく知られた文書である。林家文書目録のデータベースを作るといふ企画の発案者は、わが附属図書館に課長として三年間在職された中野美智子さんである。その中野さんが、本誌に寄稿して下

さったので、よろこんで収載した。防長近世の際だった特徴に、「記録」というものに対する執念がある。毛利家文書・益田家文書にも、林家文書にもそれを感じる。これは何を意味するのだろうか、常々考えているところである。

本プロジェクト構成員

田中誠二	人文学部教授	歴史Ⅱ文献班、日本近世史、班長、プロジェクト代表
額 厚	人文学部教授	歴史Ⅱ文献班、日本近現代史
橋本義則	人文学部教授	歴史Ⅱ文献班、日本古代史
森下 徹	教育学部教授	歴史Ⅱ文献班、日本近世史
木部和昭	経済学部教授	歴史Ⅱ文献班、日本近世史
真木隆行	人文学部准教授	歴史Ⅱ文献班、日本中世史
中村友博	人文学部教授	歴史Ⅱ考古班、考古学、旧石器・縄文、班長
村田裕一	人文学部准教授	歴史Ⅱ考古班、考古学、石器・金属器
田畑直彦	埋文資料館助教	歴史Ⅱ考古班、考古学、弥生
横山成己	埋文資料館助教	歴史Ⅱ考古班、考古学、歴史考古学
湯川洋司	人文学部教授	文芸Ⅱ民俗班、民俗学
坪郷英彦	人文学部教授	文芸Ⅱ民俗班、民俗学
尾崎千佳	人文学部准教授	文芸Ⅱ民俗班、国文学、俳諧
有元光彦	教育学部教授	文芸Ⅱ民俗班、国語学、方言

二〇一一年三月

プロジェクト代表 田中誠二